

【写真芦川】 那山那田那人

今回は第2弾「芦川写真集」から2回目の作品10点を紹介します。

芦川は農地も少なく、一つの畑も決して広くはありません。従って畑が大切、土が大切なのです。今ある畑は先人が山の木を倒し、根っこを掘り出し、土を起こし、出てきた岩や石を法面に積み上げ、汗水を流し人力で開墾してきたものです。

住民はご先祖の努力に報いるため一生懸命に畑を守ってきましたが、押し寄せる高齢と人手不足の波に阻まれ、宅地から離れた山の畑は雑木や草が生え、荒れ果ててしまったところも多くあるのが現状です。

夫婦が健在であればまだしも、主人が亡くなった家庭では残された婦人の手で管理していかなくてはなりません。それだけでもかなりの負担ですが、畑が家から遠く山道を登らなければならない場合は、高齢の身にとってこれがまた大変なことなのです。

こうした環境の中で芦川集落の婦人たちは先人の知恵を受け継ぎ、日々懸命に農作業しています。旬の野菜を作り新鮮なうちに食する。また冬越しのホウレンソウや白菜も作り、春にいただくのです。ほとんどの家庭では野菜を自給自足しています。

春になると畑には沢山の雑草が生えてきますが、腰を曲げて草取り作業をする姿があちらこちらで見受けられます。寒い冬をしのぎ、ホッとした気分になるこの時期、畑の仕事は一段と忙しくなるのです。

撮影師 高橋義一（高橋ぎいち）



1 収穫の終わった畑の端の一(ひと)畦(さく)にネギが植えられ元気に育っています。こんな隅まで畑は大切に使われているのです。ネギが収穫されるとまた次の間合いの野菜が植えられます。



2 ここは主人のいない空き家ではありません。同じ敷地内に残された旧母屋です。現在の母屋はこの建物の上の段で、もっと日当たりのよい場所に建て替えられ、ここは現在納屋として使われています。敷地の狭い芦川で敷地内に二棟は珍しいことです。



3 女性は農作業を終えて家に帰るところです。背後の畑は耕され、野菜の種が蒔かれ、発芽を促すために水が撒かれています。芦川の女性はとても働き者です。傾斜のきつい場所で働いているので、足腰はとても丈夫です。



4 屋根が傷んで丸太を流し、さらに石で抑えてありますが、面積のほとんどが森林であり、石がごろごろしている芦川では当たり前の材料です。この後、古民家は空き家となり暫くの年月が経ちます。



5 山に入り見つけた自生する片栗(かたくり)の花です。山の法面で半日陰に育ちます。通常は美しい姿を見せてくれるものですが、芦川の山は風当たりが激しく花も葉もかなり傷ついてしまいます。しかし、自然の厳しさの中で頑張っている命には力強さを感じます。



6 建物の後に山を背負い前面は傾斜地、石積みして平らな土地を確保しての敷地です。通路も狭く車は入れません。この状況は芦川の特徴的な景観です。古民家の屋根は茅で葺かれていましたが、何十年かに一度葺き直しをしなければならず、近年では材料を手に入れることが困難となり、職人を確保することもできなくなったため、屋根はトタン板を被せたものになりました。



7 2006年にこれまでの芦川村が笛吹市と合併するに当たり、閉村記念の写真を撮りました。ここ二間続きの手前の部屋は、普段家族が使用する部屋です。座っているのは買い物カート、外出の際は押して出かけるのですが、疲れたら座ることもできます。道は起伏が激しいので体力を要します。



8 藤原(ふじはら)邸(てい)と呼ばれている当時としてはかなり大きな規模の立派な古民家です。この時点では個人の持ち物でしたが、後に笛吹市が所有して改修し、観光客を受け入れて当時の様子を見せる施設として再出発しました。この写真は改修前の姿で貴重なものとなりました。



9 上芦川(かみあしがわ)集落の神社で行われた祭事の際のひとコマです。太鼓と桴(ばち)、それと鞆に置かれた榊です。桴は木の枝を切って作った簡易なものですが、それが返って自然に見えます。神主が太鼓を叩き、祝詞(のりと)あげるなか、榊は氏子の手で謹んで祭壇にささげられ、これまでの農業収穫と健康への感謝が伝えられました。



10 兜造り家屋の代表的な屋根の造りを示しています。厚みのある茅葺屋根をすっぽりとトタン板で包んでいるので屋根の淵は厚くなります。また、画面左側に便所と風呂があり、これは現在当たり前の風景ですが、1970年以前には、庭に独立した便所と風呂のある家庭が多くありました。

文 撮影師 [高橋義一](#) (高橋ぎいち)

翻译编辑 JST 客观日本编辑部